

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 30 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520392

研究課題名(和文) ジェンダーの視点から見たフランス・ロマン主義文学と絵画の相関性

研究課題名(英文) Correlation between French Romanticism (literature) and Fine Arts in the view of Gender

研究代表者

村田 京子 (Murata, Kyoko)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：60229987

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：まず、バルザック、ジョルジュ・サンド、マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモール、テオフィル・ゴーチエ、スタール夫人の小説を取り上げ、文学と絵画の相関性を分析し、絵画が小説構造に果たす象徴的な意味を明らかにした。次に、上記の作家の作品の登場人物のポルトレを抽出し、それぞれラファエロ、ジロデ、ルーベンス、ホルバイン、ドメニキーノなどの絵画的表象と関連づけ、19世紀当時の「女らしさ」「男らしさ」の概念と比較対照しながら、ジェンダーの視点から検証した。最後に、女性作家と男性作家の小説における女性の芸術家像を比較することで、女性作家独自の芸術家像を浮き彫りにした。

研究成果の概要(英文)：Firstly, I selected the novels of Balzac, George Sand, Marceline Desbordes-Valmore, Theophile Gautier, and Madame de Stael in order to analyze the interrelation between Literature and Fine Arts, and to clarify the symbolical role that fill some pictures in the structure of the novels. Secondly, having extracted the portrait of the characters from the novels mentioned above, I related each portrait with the figure of Raffaello, Girodet, Rubens, Holbein, or Domenichino, and analyzed it in the view of Gender, comparing with the notion of femininity and masculinity in the 19th Century. Finally, I compared the figures of woman artist in the novels of male and female writers to find what is the difference between them and to clarify what is the originality of the latter.

研究分野：19世紀フランス文学

キーワード：フランス文学 ジェンダー 絵画 ロマン主義

1. 研究開始当初の背景

本研究者は日本フランス語フランス文学会におけるワークショップ「人間喜劇という名の芸術工房」(2007年)を主宰し、そこで、バルザック作品における絵画の隠喩的な使われ方に対して、女性のポルトレ(人物描写)を中心に、ラファエロ、ジロデなどの聖母像と関連づけて発表した。2009年にはテオフィル・ゴーチエの作品における絵画の受容と、絵画論をバルザックとの比較のもとに分析し、「テオフィル・ゴーチエの『金羊毛』における絵画的表象」というタイトルの論文を大学紀要に掲載した。さらに、同年に日仏美術学会で「文学と絵画の間テクスト性 バルザックとジロデ」というタイトルで、ジロデの絵画およびその絵画論において、ジロデがバルザックの小説構造に与えた影響を検証する発表を行い、2010年の日仏美術学会誌に論文が掲載された。

一方で、本研究者は2006年に『娼婦の肖像 ロマン主義的クルチザンヌの系譜』(新評論)を出版し、フランス・ロマン主義文学に現れる娼婦像をジェンダーの視点から分析した。また、19世紀フランスにおいて女性作家が男性作家にどのような評価をされてきたのかを検証し、歴史に埋もれた女性作家たち(ジャンリス夫人、デルフィーヌ・ド・ジラルダン、フロラ・トリスタン)を掘り起こしてジェンダー的な視点から考察した。それを著書にまとめたのが『女がペンを執る時 19世紀フランス・女性職業作家の誕生』(新評論、2011年)である。

以上のように、本研究者はフランス・ロマン主義の様々な作家の作品と絵画の相関関係を探ると同時に、ジェンダーの視点から(特に女性作家に注目して)作品分析を行ってきた。本研究はその延長線上にある。

2. 研究の目的

- (1) 19世紀フランス・ロマン主義文学と絵画の相関性を、小説構造や小説美学と密接に関連させて考察・分析する。
- (2) 文学テクストに現れる絵画を、特にポルトレを中心に、ジェンダーの視点から検証する。
- (3) 女性作家の描く画家像と男性作家の画家像の違い、および芸術論の違いを明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 文学テクストの中で絵画、または画家に言及している部分を抽出し、絵画および画家の芸術論が小説構造、小説美学に与える影響を探る。
- (2) 比喩として絵画を援用しているポルトレを抽出し、ジェンダーの視点から分析する。
- (3) ロマン主義文学作品の中で、同じ画家、絵画を援用しているものを選び、作家間(特に男性作家と女性作家の間)の絵画の受容の共通点および相違点を探る。

4. 研究成果

- (1) バルザックの『人間喜劇』の中からは、『毬打つ猫の店』を取り上げ、バルザックにおける理想の処女像はラファエロやジロデの聖母像「純真無垢」「羞恥心」の表象であることを明らかにした。こうした聖母像に喩えられる女性は同時に、「窓辺の娘」(窓辺で花を眺めるか、針仕事に勤しむ女性)の構図として現れる。それは家庭空間に閉じ込められた女性の表象であり、さらに「欲望の眼差しの対象」、すなわち「見られる女」として立ち現れる。それに対して『ラ・ヴェンデッタ』では、「欲望の眼差しの主体」(「見る女」となった女性が登場する。女主人公とその恋人の関係は、ジロデの《エンデュミオンの眠り》が表象する世界「女性化された肉体」を持つ青年の美しい裸体に垂直の視線を投げかける「月の光(=女神ディアナ)」と重なり、女主人公は「ファルス的な視線」の持ち主として描かれている。それは19世紀当時のジェンダー規範に反する行為であり、彼女は父権制を揺るがす危険な存在として、罰として死ぬ運命にあった。バルザックはジロデの絵画を19世紀フランス社会に置き換えて、文学的転換を目指したと言える。バルザックとジロデとの関わりは深く、『人間喜劇』における天才的な画家像(『毬打つ猫の店』のソメルヴィユ、『知られざる傑作』のフレノフェール)にジロデの性格が反映されているばかりか、フレノフェールが展開する絵画論には、ジロデの絵画論の影響が見出せる。ただし、ジロデとの相違点は、バルザックの画家が絵画的表象を愛情の対象とみなしていることで、バルザックにとって絵画は心や感情を表わす指標として機能している。

ジロデがバルザックに及ぼした影響に関しては、本研究に着手する前から探ってきたが、本研究でさらに詳細に分析することで、両者の関係を明確に規定することができたと思う。

- (2) テオフィル・ゴーチエに関しても、すでに彼の作品『金羊毛』を取り上げ、ロマン主義時代に席卷した「ピュグマリオン神話」(男の画家がその天分で絵画的表象に生命を吹き込む、という芸術家の創造神話)と結び付けて、バルザックとゴーチエの違いを明らかにした。ゴーチエの場合、芸術家ではなく芸術愛好家の立場に立ち、生身の女性を絵画的表象(主人公が「理想の女性」とみなすルーベンスの「マグダラのマリア」)に還元しようとするものであった。三次元の女性を二次元の画布に閉じ込めようとするゴーチエの試みは、本来のピュグマリオン神話とは逆のパターンであること、また、バルザックの「深層の美学」に対して、ゴーチエは「表層の美学」を標榜したことを明らかにした。

本研究ではさらにゴーチエの『カンダウレス王』を取り上げ、彼の「石の夢」に焦点を

当てて検証した。理想美を大理石に固定したいというゴーチエの望みは、「美の永遠化」を目指すものであると同時に、現実の女性によって去勢されることを恐れる「去勢コンプレックス」にも基づくものであった。『カンダウレス王』の後半部では、「魂」を蔑ろにされ、「彫像」とみなされた女性の側からの反撃が描かれている。本研究ではこうした女性の反撃を「メドゥーサ神話」と結びつけ、魅惑すると同時に嫌悪を抱かせる「蛇」のイメージをアングルの《奴隷のいるオダリスク》、クレサンジェの《蛇に咬まれた女》、およびルーベンスの《メドゥーサ》など、絵画・彫像を通して分析した。こうした分析を通して、ゴーチエの芸術観をより鮮明に捉えることができた。

(3) 女性作家マルスリーヌ・デボルド=ヴァルモール(以下、ヴァルモール)の小説『ある画家のアトリエ 私生活情景』を取り上げ、バルザックの作品集『私生活情景』の中で同じく女性画家が登場する『ラ・ヴェンデッタ』と比較対照することで、女性作家が描く女性画家像の特徴を明らかにした。バルザックの小説の舞台となる画家のアトリエは、アドリエヌ・グランピエール=ドゥヴェルジの《アベル・ド・ピュジョルのアトリエ》師匠である男の画家が絵の中央に位置し、画塾の娘たちを統制する存在として描かれているを彷彿とさせ、父権的な空間のメタファーとなっている。それに対してヴァルモールの小説における画家のアトリエは、オラース・ヴェルネの《アトリエ》、またはジャン=アンリ・クレスの《ダヴィッドのアトリエ》を彷彿とさせ、自由・平等の精神が漲り、男同士の親密な連帯感で結ばれたホモソーシャルな空間として提示されている。その中で「妹」として他の男の弟子たちから受け入れられてきた女主人公が、彼らに「女」として意識された時、彼女はアトリエから疎外され、それが彼女の死の一因となっている。このようにアトリエは、女の芸術家の周縁化と、この拒絶のもたらす破壊的な力の空間的メタファーとして機能している。

しかしながら、ヴァルモールはジョルジュ・サンドのように男性優位の社会への異議申し立てをする女性を描いたわけではない。女主人公はむしろ、父権制社会が理想とする女性像(「涙」「沈黙」「服従」「憤ましさ」などの属性を持つ)を体現し、その価値観を内在化しているように見える。しかし一方で、ジロデの《大洪水の情景》をめぐっての叔父の画家と女主人公の意見の相違を通じて、作者は男性的な価値観の相対化を計っている。ヴァルモールは序文において、家庭空間に閉じ込められた「女性」と、孤独のうちに創作活動に没頭する「芸術家」をどちらも「社会=公的空間」から疎外された存在とみなしている。彼女は芸術家を、伝統的に男の領域とされてきた「公的空間」から女の領域である「私的空間」に移行させ、その生を「私生活

情景」として描いたのである。このようにヴァルモールは、「産む性」である女性が、自らの「女性性」を否定することなく芸術創造の主体となる可能性を示している(それは、女主人公が理想とする同時代の女性画家オルタンス・オードブル=レスコの肖像画によって具現化されている)。

一方、バルザックの『私生活情景』は専ら家族や結婚の問題を扱うもので、画家のアトリエが舞台となる『ラ・ヴェンデッタ』においても、物語の主題は父親の反対を押し切って結婚した娘の悲劇であった。そこにバルザックとヴァルモールの作品の大きな相違点が見出せる。ヴァルモールが目指したのは、不平等な社会を告発し、女性の権利を声高に要求するよりも、むしろ物語冒頭のアトリエが象徴するような、男女の隔てのない平等と連帯の精神に基づいた社会の確立であったと言える。

(4) ジョルジュ・サンドの作品において、まずラファエロの聖母像に喩えられる女性を取り上げ、その属性を分析した。初期小説『ローズとブランシュ』のブランシュがそれに当たると、彼女はバルザックをはじめとする男性作家がラファエロの聖母像に抱く女性像と重なる「消極性・受動性・自己犠牲」の象徴であった。しかし、後の作品『イゾドラ』では、こうしたクリシェに当てはまらない女性アガトが登場する。彼女は「純潔で憤み深い」性質であると同時に「強固な魂」の持ち主として描かれている。サンドは「意志の強い女性」という新たなイメージをラファエロの聖母像に付与し、男性作家との差異化を計っている。

さらに『ジャンヌ』では、女主人公は「力強い肉体的存在感」を持つホルバインの聖母像に喩えられ、大地や自然と深く結びついた「原初の女」のイメージで立ち現われる。自然の叡智を備えたジャンヌは危機的な状況に陥ると、人々に畏怖の念を引き起こすまでの強靭さと神秘的な力を発揮する。こうした女性像は男性作家の作品には見出せないもので、そこにサンドの独自性が発揮されている。

次にサンドの晩年の作品『ピクトルデュの城』を取り上げ、ファンタジーの側面ではなく、「芸術小説」とみなして、女主人公が職業画家に成長していく過程を検証した。それ以前の作品『彼女と彼』にも女性画家が登場するが、そこではモデルの顔の表情や衣装を忠実に模倣する肖像画家(=女性画家)と、創造行為に携わる天才的な歴史画家(=男性画家)というジェンダー的対立構造のもとに描かれていた。それに対して『ピクトルデュの城』では、父親の画家ではなく、娘の方が天分ある画家として登場している。本研究では、彼女が自らの内に潜む天分をいかに開花させていくかを、イニシエーションの場としての「城」の役割、「自然」による画家の開眼を通して、さらに彼女と対極にある父親

の肖像画家との対比のもとに、作者が影響を受けたドラクロワの芸術観とも絡めて検証した。こうした分析を通じて、サンド独自の女性画家像 男性作家の作品では芸術の奥義が男から男に伝わっていくのに対して、サンドの作品では亡くなった母親の導きで女主人公が「真の芸術家」に成長する母権的な構造となっていることを明らかにした。

(5) ジョルジュ・サンドと同時代を生き、サンドの『魔の沼』との関連を指摘される動物画家ローザ・ボヌールを取り上げた。サンドと同様に「男装の画家」として有名なボヌールの生涯（とりわけサン＝シモン主義思想の影響、および画家である父親から自立して、自分の名で作品を出展していく過程）とその作品（《ニヴェルネー地方の耕作》、《馬市》など）を詳細に分析した。その結果、「男性的な遅しさに溢れた動物画を描いた彼女が、女性の芸術家同士の連帯に基づくユートピアの建設を目指していたことが明らかになった。

(6) スタール夫人の『コリンヌ』を取り上げ、作中で言及される絵画・彫像を手がかりに物語を読み解いた。ドメニキーノのシビュラに喩えられる女主人公は異教の世界に属し、エネルギーに溢れているのに対して、彼女の異母妹はコレッジョの聖母に喩えられ、キリスト教的な道徳観に合致する慎ましい女性として描かれている。一方、男の主人公はカノーヴァの彫像を彷彿とさせるメランコリックで「女性的な肉体の持ち主」であった。天才的な女性を受け入れ、称賛を惜しまないイタリア社会と、女性に良妻賢母の役割のみを期待する家父長的なイギリス社会の二項対立がこうした人物像に反映され、それが絵画・彫像の比喻によって浮き彫りにされている。

本研究では、『コリンヌ』において絵画・彫像が登場人物の身体的特徴を視覚化し、その気質、精神状態の移り変わりを表わす指標として機能していることを明らかにした。さらに主人公たちが巡る美術館（ヴァチカン美術館、ウフィツィ美術館）や女主人公の住まいにある絵画・彫像の描写を精査することで、それが女主人公の運命を予告し、物語の展開に密接に関わることを立証した。さらに、ナポレオンに対する政治批判や、女性を家庭空間に閉じ込め、天分を持った女性を疎外しようとする保守的な社会に対するスタール夫人の異議申し立てを、絵画的表象を通して読みとることができた。

(7) 自然主義作家ゾラの『ナナ』を取り上げ、ロマン主義的クルチザンヌと一線を画すゾラの娼婦像を見極めるために、ロマン主義文学（アベ・プレヴォー『マノン・レスコー』、アレクサンドル・デュマ・フィス『椿姫』、バルザック『娼婦盛衰記』『従妹ベット』など）からゾラの『ナナ』に至る娼婦像の変遷を、それぞれの女性像に関わる絵画的表象と結びつけながら考察した。

以上のような研究成果の一部を本にまとめ、『ロマン主義文学と絵画 19世紀フランス「文学的画家」たちの挑戦』（新評論）というタイトルで2015年3月に出版した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10件)

村田京子、「絵画・彫像で読み解く『コリンヌ』の物語」、『女性学講演会 第1部「文学とジェンダー」』、査読無、第18期、2015、30-69

村田京子、「フランス語の授業におけるシャンソンの活用」、『シャンソン・フランスーズ』、査読無、第6号、2014、32-45

村田京子、「ジョルジュ・サンドとエツェル 30年にわたる友情」、『Excelsior!』、査読無、第8号、2014、125-145

村田京子、「テオフィル・ゴーチエと造形芸術 ゴーチエの「石の夢」」、『女性学講演会「女性学・ジェンダー研究の現在」』、査読無、第17期、2014、54-78

村田京子、「男装の動物画家ローザ・ボヌール その生涯と作品」、『女性学研究』、査読無、20号、2013、45-89

村田京子、「『見られる女』と『見る女』 ジェンダーの視点から見た19世紀フランス文学と絵画」、『日韓シンポジウム報告書』（大阪府立大学女性学研究センター）、査読無、2013、190-203

村田京子、「マルスリーヌ・デボルド=ヴァルモール『ある画家のアトリエ』 パルザックの絵画小説との比較研究」、『人間科学:大阪府立大学紀要』、査読無、8号、2013、3-39

(<http://hdl.handle.net/10466/12840>)

Kyoko Murata, « Assimilation de l'esthétique du roman-feuilleton chez Balzac », *Balzac et alii, génétiques croisées. Histoires d'éditions*, 査読無、2012、1-15.

(<http://balzac.cerilac.univ-paris-diderot.fr/balzacetalii.html>)

村田京子、「ジョルジュ・サンドの作品における女性画家像 『ピクトルデュの城』をめぐって」、『女性学研究』、査読無、19号、2012、1-36

(<http://hdl.handle.net/10466/13709>)

村田京子、「デルフィーヌ・ド・ジラルダンのメディア戦略：パリ通信」、『人間科学大阪府立大学紀要』、査読無、7号、2012、1-27

(<http://hdl.handle.net/10466/12591>)

〔学会発表〕(計 15件)

村田京子、「絵画・彫像で読み解く『コリンヌ』の物語」、『女性学講演会「文学とジェンダー」』（於 大阪府立大学）、2014年12月13日

村田京子、「ジャンリス夫人における女子教育論」、ゾントクラブ（於 大阪リーガロイヤルホテル）、2014年11月13日
村田京子、「フランス語授業におけるシャンソンの活用」、シャンソン研究会（於 信州大学）、2014年11月8日
村田京子、「『女性初の偉大なルポルタージュ作家』フロラ・トリスタン」、日仏文化講座CAF（於 神戸国際会館）、2014年6月10日
村田京子、「ロマン主義的クルチザンヌからゾラのナナへ 19世紀フランス文学における娼婦像の変遷」、名古屋市立大学人間文化科学研究科主催講演会（於 名古屋市立大学）、2014年1月30日
村田京子、「テオフィル・ゴーチエと造形芸術 ゴーチエの「石の夢」」、女性学講演会「女性学・ジェンダーの現在」（於 大阪府立大学）、2013年12月14日
村田京子、「ジョルジュ・サンド『彼女と彼』から『ピクトルデュの城』にいたる女性画家像の変遷」、日仏女性研究学会（於 奈良女子大学）、2013年11月9日
Kyoko Murata, « La figure idéale de la femme peintre dans l'œuvre de George Sand », *Écrire l'idéal: Recherche de George Sand*, (Université catholique de Louvain, Belgique), 2013年6月22日
村田京子、「サンドの作品世界における理想の女性画家像」、日本ジョルジュ・サンド学会（於 国際基督教大学）、2013年6月2日
村田京子、「男装の動物画家ローザ・ボヌール その生涯と作品」、女性学コロキウム「美術、文学とジェンダー」（於 大阪府立大学）、2012年12月22日
村田京子、「マルスリーヌ・デボルド=ヴァルモール『ある画家のアトリエ』における女性画家像」、日仏女性研究学会（於 大阪府立大学）、2012年11月23日
村田京子、「画家のアトリエ マルスリーヌ・デボルド=ヴァルモールとバルザックの作品の比較研究」、関西バルザック研究会（於 近畿大学会館）、2012年3月31日
村田京子、「ジョルジュ・サンドの作品における女性画家像 『ピクトルデュの城』をめぐって」、女性学コロキウム「文学とジェンダー フランス文学と絵画」（於 大阪府立大学）、2012年2月4日
村田京子、「『見られる女』と『見る女』ジェンダーの視点から見た 19世紀フランス文学と絵画」、日韓シンポジウム「ジェンダー研究の現在」（大阪府立大学女性学研究センター主催）第2シンポジウム「多文化とジェンダー」（於 大阪府立大学）、2011年12月18日
村田京子、「デルフィーヌ・ド・ジラルダンのメディア戦略 「パリ通信」」、シンポジウム「19世紀フランス文学とメディ

ア」（於 一橋大学）、2011年5月28日

〔図書〕(計 5件)

村田京子、「『ロマン主義文学と絵画 19世紀フランス「文学的画家」たちの挑戦』新評論、2015年、総頁数217頁
村田京子、喜多崎親、鳥海基樹、小倉孝誠、吉田典子（ほか16名）『西洋近代の都市と芸術2 パリ 19世紀の首都』、竹林舎、2014年、担当部分：「ロマン主義的クルチザンヌからゾラのナナへ 19世紀フランス文学における娼婦像の変遷」、129-148
Kyoko Murata, Nathalie Prince, Francisco Lafagra, Carmen M. Pujante Segura, Barbara T. Cooper（ほか17名）, *Femmes novellistes françaises du XIX^e siècle*, Peter Lang, Bern, 2013, 担当部分：« Stratégies de l'écriture féminine chez Delphine de Girardin : *Courrier de Paris* », 113-124
村田京子、坂本千代、西尾治子、高岡尚子（ほか8名）『200年目のジョルジュ・サンド 解釈の最先端と受容史』、新評論、2012年、担当部分：「解釈の新しい視座 2 交差する芸術」第4章「絵画に喩えられた女性たち」、146-160；「受容の歴史 ジョルジュ・サンドと日本 第3章 研究史」、234-243
村田京子、「『女がペンを執る時 19世紀フランス・女性職業作家の誕生』新評論、2011年、

〔その他〕

ホームページ等

(<http://sand200balzac.sakura.ne.jp/>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 京子 (MURATA Kyoko)
大阪府立大学人間社会学部教授
研究者番号：60229987